

『地球。宇宙。そして、光加』

✱

このあいだ、休業さんとカニカマさんと食事をした。

「カシスオレンジ三つ下さい」

と休業さんが言った。

「誠に申し訳ないのですが、当店にカシスのご用意はございません」

「では、カシスウーロン三つ下さい」

「申し訳ございません。カシスのリキュールをご用意しておりません」

「そうでしたね。では、カシスピーチ三つ下さい」

「かしこまりました。カシスピーチ三つですね！」

ざわざわしながら去っていく店員さんを見つめる休業さんが一言、「もう嫌になっちゃ
うわ」と洩らした。

「お待たせしました。緑茶二つと水道水一つです」

大きな拍手をして緑茶を受け取る休業さん。つられたカニカマさんも拍手をして緑茶を
受け取った。僕は丁度、水道水が飲みたかったから心の奥底で拍手をした。

「上手くないかって幸せですよね」

とカニカマさんが緑茶を掲げながら言った。

「上手くいった時点で不幸せの始まりだもんね」

と返した休業さんも緑茶を掲げる。

二人に流れる空間はキャラメルポップコーンのような匂いがした。

僕は、水道水を掲げる。

休業さんが、『チアーズ』と乾杯を促してくれた。

緑茶二つと水道水一つ、三つのグラスが合わさる音が、この世の中に誕生した。

「お待たせしました。チキン南蛮定食三つです」

まだ何も頼んでいないのに？ 何ならメニューを見ながらチキン南蛮定食だけはやめておこうかなと思っていたところだったのに店員さんが、『自慢の一品をお持ち致しました！』みたいな表情を全面的に押し出しながらチキン南蛮定食を持ってきた。

「私がこっそり頼んでおきました。サプライズ注文ってやつですね」と休業さんが白い歯を見せながら言った。

「完全に驚かされましたよ。いつの間に？」とカニカマさんが絶妙な間を埋めていく。

「それは企業秘密です」と口をおさえる休業さん。
「そんなないじわるしないで下さいよ」と休業さんを肘でつつくカニカマさん。

僕はチキン南蛮定食を受け取りながら店員さんに、これは何ですか？ と目で訴えかけた。

『このあと物凄い展開になるぞ』と声には出さず僕だけに見えるように口元を動かした店員さんは切り替え上手なのか、僕以外のふたりには満面のハニカミを披露しながらチキン南蛮定食を渡した後、おひつに入ったお米を置いて戻っていった。

「ここのお米が絶品なんです」

おひつを開けた休業さんがお米から立ち込める湯気を浴びながら言う。目を閉じて匂いを存分に味わいながら、『グ راشアス』と付け加えた。

僕は、ごくり。と唾をのんだ。

だってめちゃくちゃ美味しそうに見えたから。

「そーいや、あれ知ってます？」

カニカマさんが別の角度から話題を提供してきた。
休業さんは一旦おひつに蓋をしてカニカマさんの話を聞く態勢に入った。

「クジラに乗った海賊五人組の話です」とカニカマさんが言った。

僕は、ごくり。と息をのんだ。

「知らないわ」

と言った休業さんは緑茶を一口飲んだ。

「それがどうかしたの？」

「特に何もないんですけどね」

とカニカマさんが答えた。

『それなら今この瞬間じゃなくてもいいじゃん』と思った僕は、おひつに視線を送った。
あの、ゆんわりと立ち込める湯気の思惑が食欲をそそってくる。

「特に何もないなら自分たちで物語を作っちゃおっか？」

と休業さんが言った。

「それはナイスアイデアですね！」

とカニカマさんがグーサインを出した。

やはり、二人の間にはキャラメルポップコーンのような匂いが流れている。

「お待たせしました。アジの南蛮漬け定食三つです」

と店員さんが言った。

え？ 多分、間違えてますよ？ と言おうとしたとき、休業さんが大きな声で、
『待ってました！』と、手を叩いた。そして、『もしかして？』と、カニカマさんがつぶ
いた。

「サプライズ注文、第二弾でございます！」

休業さんの声が一直線に僕の耳のなかに入り込んで通り抜けていった。

「第二弾があるということとは？」

と休業さんを肘でくいくいするカニカマさん。

「企業秘密でございます！」

と両手を掲げる休業さんは勝ち誇った表情を見せていた。

僕たち三人は、店員さんからアジの南蛮漬け定食を受け取った。

「南蛮づくしだね」

とテーブルを眺める休業さんが言った。

「世界が広がりますね」

とカニカマさんがつぶいた。

僕は水道水をひとくち飲んだ。

そして、蓋が覆いかぶさったままのおひつに目を向ける。

ここで突然、『皆様、時が来ましたよ！』と店内のスピーカー越しから誰かの声が聞こえてきた。

僕たち三人は同じ方向に視線を移した。店内の中央辺りにマイクを持った店員さんが一人、佇んでいた。

「さて皆様、封筒をお持ちでしょうか？」

マイクを持った店員さんがめっちゃ格好つけながら言った。

このお店では入店時、一人一人にちいさな封筒を配っている。『時が来るまで開けずにお持ち下さい』と伝えられて渡されたので律義に従ってその時が来るまでポケットに仕舞い込んでいた。

「エンターテインメントが始まるのです！」

どうやら彼はナルシストみたいだ。

「封筒の中にこのような小さな紙切れが入っています」

彼はめっちゃくちや格好つけた紙切れの見せ方を体現していた。

「そこに番号が記されています。今から私が番号を発表しますので皆さまご確認ください。見事当選されたお客様は潔くステージまでいらしてください」

彼はポケットから手鏡を取りだして前髪を確認し始めた。

「ちなみに私事ですが、ナルシストすぎてこのバイト先や学校内で陰口を叩かれて笑いのにされています」

どうやら彼は自らを自虐的に扱う術を身に着けているみたいだ。

僕の中での彼の見方が少しだけ変わった。

「陰口叩かれても」

彼は両手で店内を煽った。

「めげない、めげない！」

厨房の中から大勢のスタッフの声が轟いてきた。

厨房以外からはパラパラと『めげない』というワードが飛び交っていた。
数人の常連客が混ざっているみたいだ。

「ありがとうございます。ありがとうございます」

深々と頭を下げる彼のお辞儀の角度が様になりすぎている。

彼は、こっそり手鏡を右ポケットに仕舞い込んだ。

どうやら彼は普段からとても礼儀正しいみたいだ。

僕の中での彼の見方が大幅に変わった。

もしかして、すべて、わざと、やっている？

「それではさっそく番号を発表したいと思います！」

そう言った彼は、店内に設置されているドラムセットへと向かい、みずからドラムロールを請け負った。

ドロドロドロドロドロ。

僕は彼のドラムロールを聴いて才能を感じた。

もしかして、すべて、わざと、やっている？

ドロドロドロドロドロドロッ、ドン！

「三十三番の方！」

「皆さん、何番ですか？」

とカニカマさんが瞬時に訊ねてきた。

「私はチキン南蛮」

と休業さんが真面目に答える。

「そのナンバンじゃないですよ」

とカニカマさんはとつても嬉しそうな表情を見せた。

「冗談は顔だけにしろって？」

と休業さんは白い歯を見せながら言った。

「もうホントにやめて下さいよお。お腹がねじれちゃいますよお」

「カニカマちゃんは何番だったの？」

休業さんは人の話をあまり聞いていないのかもしれない。

「私は、八十八番でした」

圧倒的な対応力をみせるカニカマさんと同じように周りの食卓からは、『十四番だった』『五十二番だった』と外れた番号を嘆く声が交差していた。

一つ、店内を見回した。

まだ当選者は現れていないみたいだ。

僕は興味本位でポケットに忍ばせた封筒を開けてみることにした。何番だろう？ もし三十三番だったら何が起こるのだろうか？ 胸が高鳴って想像が広がる。欲望に底なんてありやしない。ちらりと見た瞬間、そっと封筒に戻して何もなかったことにした。

「休業さん、本当は何番なんですか？」

とカニカマさんが訊ねた。

彼女は、『三十三番』と答えて、右手をあげて立ち上がり店員さんの待つ中央のお立ち台へ向かった。

僕とカニカマさんの目が合って、二人で首を傾げた。

「ちなみに何番だったんですか？」

とカニカマさんが質問してきた。

一瞬、躊躇ったが、思いとどまって、封筒から紙切れを取り出した。そして、洪々彼女に見せつけた。

「チキン南蛮」

「冗談は顔だけにしてくださいよ」

とカニカマさんが真面目に答えた。

「冗談じゃなくて真実なのよ」

彼女はそこに書かれた文字を見て目を丸くした。

僕はカニカマさんに見せた紙切れをもう一度、自分の目で確かめる。

ゴシック体で『チキン南蛮』と書かれていた。

「ゲームに参加させてもらえないってある意味、幸せですよね」

ある意味を付ければなんでも成り立つのか？

「良い意味で言ってるので勘違いしないで下さいね」

良い意味を付ければ都合がよすぎる言葉に成り代わらないか？

「何番とナンバーって似てますよね」

フォローにも何にもなっていないか？

「それよりチキン南蛮の由来、知ってます？」

『知らない』と答えた。

「私も知らないんですけどね」

カニカマさんはこの一連の言葉を終始、笑いを押し殺しながら扱っていた。

本来なら苛立ちの感情が湧きあがってもおかしくない局面なのになぜか僕の心は穏やかになっていく。これがキャラメルポップコーンの威力なのだろうか？

僕は、目の前で笑いを押し殺すキャラメルポップコーンの片割れに微笑んだ。そして、その相方が待つ中央のお立ち台に視線を向けた。すると、ナルシストを装っている彼が休業さんに握手を求めているではないか。どうしてだろう？

少し距離があるので二人の会話は聞き取れなかった。

彼は目の色を変えて休業さんをお願いをしているみたいだった。

休業さんは白い歯を見せながら手を横に振って断りを入れてるように見えた。めげない彼は両手を合わせ必死にお願いしている様子。

掛け合いが続いた後、休業さんが一つ肯いて彼の肩にポンポンと手を乗せた。

ナルシストキャラを演じているであろう彼は、その時ばかりは素の状態に戻ってしまっただのか内股になって可愛らしく飛び跳ねていた。

すぐさま、マイクを握り直した彼が言葉を放つ。

「本日、僕の願いが叶います」

お立ち台に上る休業さんが照れくさそうに右手をあげた。

「それでは、よろしく願います！」

彼はもうナルシストでも何でもなく、一人の誠実な青年に成り代わっていた。

「そこまでおっしゃるのなら」と発した休業さんは自分の世界観に身を潜めようとする。

五分くらいのあいだ……皆で休業さんの世界観を見守った。

休業さんがお立ち台の上から身振り手振り。口元をバクバク動かしているが、声は発していない状態がつづいている。終始、不思議に思っていた僕はカニカマさんに視線を移してみた。

彼女は、頬杖をつきながら休業さんを眺めていた。

堪らず僕はカニカマさんに訊ねてみた。「休業さん、なにしてるの？」

「見たら分かるじゃないですか」

「見ても分からないから訊ねただけど？」

「サイレントスピーチですよ」

「サイレントスピーチ？」

「まさか、知らないんですか？」

カニカマさんは、わざと大袈裟に驚いた素振りを見せながらこちらへ視線を向けた。

「むかし、地球という惑星があったのは知っていますか？」

一体、何を言っているんだ？　と思っただけど、興味本位で寄り添ってみることにした。

「もちろん知ってるよ」

「さすがにそこまで馬鹿じゃないですよね」

「おかげさまで」

「じゃあどこまで知っていますか？」

「なにが？」

「地球とサイレントスピーチの関係に決まっているでしょ」

僕は、『ああ』と呟いた後、返す言葉がなにも浮かんでこなかった。

「ごめん。度忘れしちゃった」

彼女は大きなため息を吐いて、仕方がないなあ、という表情を見せつけながら口元を開いた。

「むかし、地球という惑星に住んでいた人間という生き物が扱っていた『言葉』という概念が徐々に価値を無くしていったんです。これ、なぜだか分かります？」

混乱する思考のまま首を横に振った。

「ごめん。まだ度忘れ中だ」

彼女は呆れるように又、ため息を吐いた。

「情報が掴み取りやすくなったことで理想だけを語れるようになって、言葉だけに頼る人間が増えすぎて行動が伴っていない言葉が主流になりすぎたことによって、言葉そのもの

に信頼感が宿らなくなったんですよ」

僕は彼女の言葉を自分なりに整理して吐き出してみた。

「行動よりも言葉が先行していた時代があったってこと？」

「今じゃ考えられないですよね？」

カニカマさんは僕の言葉を腑に落としてくれたみたいだった。

「歴史ってそういうものなんでしょうけど」

僕は気を紛らわすために店内を見渡した。皆、食卓に並べられている食材には一切手を付けていなかった。皆、中央辺りのお立ち台に一点集中。食事に来たことすら忘れ、休業さんのパフォーマンスから目が離せないみたいだった。

「有言不実行の世界に未来が訪れると思います？」

カニカマさんが僕に、こちらへ意識を戻しなさい、とでも言うように言葉を発してき
た。

「僕は有言実行が好ましいと思っていますよ」

「質問の答えになっていません」

カニカマさんはずっと嬉しそうな表情を見せた。

「もしかして、地球人ですか？」

おもわず、はいそうです。と言おうとした。

けれども、先にカニカマさんが言葉をつづけた。

「ホント、有言不実行の時代に生まれ落ちなくて良かったなとつくづく思われます。私たちはラッキーですよ。言葉と行動がある程度合致する世の中はとっても生きやすいですもんね」

カニカマさんはいつの間にか休業さんに視線を移していた。
少しの間、彼女のパフォーマンスを見つめてから口を開いた。

「言葉に頼らずにどれだけ伝えられるのか……その名残みたいです」

休業さんを見つめる彼女の瞳はキャラメルポップコーンのような甘い匂いがした。

「ちなみに、休業さんはサイレントスピーチの覇者ですよ」

「覇者？」

僕はカニカマさんと同じようにお立ち台へ視線を向けた。

「彼女は今、十八番を披露しています」

「オハコ？」

「覇者になった時のスピーチです」

僕の頭は理解不能に侵されて爆発寸前だった。『けれども、男には引いてはいけない場面があるんだ』ともう一人の僕がしつこく言ってくるもんだから、彼女の世界観に最後まで寄り添うことを胸に誓った。

「題材は？」

「自分が登場しない夢について」

カニカマさんは一時間空けてから言った。

「です」

僕はもう一度辺りを見渡した。観衆はまだ誰も食事には手を付けていない。飲み物にすら触れていないようだった。彼らのなかの数人は、目頭を熱くさせていた。

「それって主観が存在しない夢なのかな？」

「映画を見ているような感覚なんじゃないですか？」

「夢の中で上映される映画ってもう二度と同じもの見られないよね？」

「そうですね」

とカニカマさんが言った。

「ただ、エンドロールまでたどり着けるか分からないですけどね」

「確かに」

と感心してしまった。

「夢ってなんなんだろうね？」

「夢は夢に決まっているじゃないですか」

一瞬、カニカマさんは呆れるように天井を見あげた。

「それ以外になにがありますか？」

首を横に振るしか選択肢がなかった。

「なんだか別の惑星の人間と会話しているみたいです」

「地球人とか？」

「分かりません。実際に地球へ行ったことがないので」

「僕、行ったことあるよ」

「冗談は顔だけにしてください。じゃあサイレントデイを経験したんですか？」

「サイレントデイ？」

「地球全体の祝日『サイレントデイ』ですよ。地球に行ったのなら経験していてもおかしくないですからね」

僕はあからさまにとぼけた。

そして、カニカマさんの言葉を辛抱強く待った。

「地球にサイレントデイが設けられたんです。その日一日中誰も何も言葉を発しなかったみたいです。別名、『地球から音が消える日』と呼ばれていたそうです」

地球から音が消えたら一体、どんな世界になるのだろうか？

「サイレントデイ以外の日でも地球上のあらゆる場所に拡散して一大ブームになったみたいです」

「口先よりも背中で見せる方が説得力、増すから？」

「皆、気づいていたんじゃないですかね？ このままでは終焉を迎えてしまうことを」

「じゃあ地球はサイレントデイのお陰で説得力を取り戻したんだ？」

「いえ」

と、彼女は歯切りの良い言葉を扱った。

「結局、ブームは長く続かず、又、普段通り言葉が先行するようになって、いつの間にかサイレントデイも消滅してしまったみたいですね」

ふと、『言葉って何者だ?』と思った。

「やっぱり言葉に頼る方が楽じゃないですか。何もしてなくても何かしたみたいに表せますから」

僕はカニカマさんの言葉に軽く相槌を打った。

そして、サイレントスピーチの覇者のパフォーマンスをちらりと見つめた。

休業さんは丁度スピーチを終え、お辞儀をするところだった。

店内からは拍手が鳴り響いている。

「そして、言葉と行動が乖離し過ぎて滅びたみたいです」

「なにが?」

「地球に決まっているでしょ」

僕は率直な意見を手渡していた。「詳しいんだね?」

「わたし学生の頃、歴史の授業になると異常なくらい頭が冴えてきたんです」

僕は、『そうなんだ』と言った。

「言葉って安易に扱っちゃ痛い目見ますよね」

『だね』と言った僕はこの一連の言葉の安易さを認めないわけにはいかなかった。けれども、カニカマさんが放った言葉によって薄い想いは帳消しにされた。

「いつの時代も変わらないのはラブサイケデリコの音楽が愛されているということです
ね」

「LOVE PSYCHEDELICO~」

と言いながら僕は、『確かにその通りだな』と思った。

「FEEL YOU ALL」

耳の中に聞き慣れた声が入り込んできた。

「A DAY FOR YOU」

とすぐにカニカマさんが返した。

「ですね」

「大正解」

と休業さんが発した。

言葉を放つ休業さんを見ると少しだけ不思議な感覚に陥った。

「お疲れ様です！」

カニカマさんが、一仕事終えて座った休業さんを肘でくいくいしている。

「さすがサイレントスピーチの覇者ですね」

休業さんはカニカマさんの言葉に応えることなく、おひつの蓋を開けた。

「ああ、お米が冷めちゃったわ」

あのゆんわりとした湯気はもうどこにも見当たらなかった。

「替えてもらえるか聞いてみます？」

とカニカマさんがお気遣いを立てた。

休業さんは首を横に振った。

「もちろん湯気が立ち込めているほうが有難いけど、冷めたお米が目の前にあるのなら、私は現実を受け止めるわ」

彼女は、『仕切り直しましょう』と言ってグラスを掲げた。

僕たち三人は飲みかけの緑茶二つと水道水一つ、三つのグラスが合わさる音を、この世の中に誕生させてしまった。

「思い通りにいかないって幸せですよね」
とカニカマさんが言った。

「思い通りにいくのが当たり前だと思い込んでいるうちは永遠に不幸せだもんね」
と休業さんが返した。

僕は水道水をひとくち飲んでから辺りを見渡した。
先程の空間が嘘のように皆、食事に集中しているようだった。

「二人でなに話してたの？」
と休業さんが訊ねてきた。

「サイレントスピーチと地球の話をしていました」
とカニカマさんが返した。

「地球の名残だもんね」

「この人、何も知らないんですよ」

「地球人みたいな顔してるから仕方がないじゃん」

「宇宙よりもちいさい惑星があったなんて信じられないですよね」

「今は宇宙がちいさいと言われているのにね」

ホントに、ここはどこなんだ？

「あの、一つ聞いてもいいですか？」
とカニカマさんが言った。

「もちろん何なりと」
と休業さんが返した。

「自分が登場しない夢ってどんな感覚なんですか？」

休業さんは、一つ咳払いをした。

「体験した人間にしか分からない感覚。言葉で伝えられるものではないかな」
彼女の声色には、キャラメルポップコーンの匂いが含まれていなかった。

「お待たせしました。鴨南蛮定食三つです！」

「まさか？」
とカニカマさんが対応する。

「サプライズ注文、第三弾？」
と僕もつづけて言っていた。

「そんなことあるわけじゃない
と休業さんが真面目に答えた。

「サプライズなんて二度も起こればもうお腹いっぱいでしょ？」

彼女の声色には、キャラメルポップコーンの匂いが舞い戻っていた。

「先ほどは有難うございました」

あの、姿勢の美しい店員さんが言った。

「余計なことしないでもらえる？」

「でも、スピーチを聴かせていただきましたし、そのうえサインまで書いていただきて……」

彼は色紙に書かれたサインを丁寧に見せた。

「幼い頃から婆ちゃんに、礼儀だけはしっかりしておけ、と言いつけられていたので」

「それでも」

と休業さんが遮った。

「鴨南蛮は受け取れません」

「そうおっしゃらずに、ほんの気持ちなので受け取ってください」

「アナタがしていることはお節介なの」

そこまで言わなくても……。

とおもった僕の脳裏には彼のドラムロールが響いていた。

「そこまで言わなくてもいいんじゃないですか？」

珍しくカニカマさんが否定した。

「いいんです。僕の欲望が勝手に押し付けたことです。善かれと思ってやったことな
んですけど、相手がそう感じなかったら……」

カニカマさんは彼の複雑な想いを言葉に出させなかった。

「私の分だけでも置いていけばいいですよ。私はあなたの欲望を受け取りますよ？」

「いいんです。その御好意は有難く受け取ります」

彼は、微笑んだ。

「これも現実ですから」

彼は休業さんに目を向けた。

「今日、眠る前の内省の題材にさせていただきます。有難うございました」

彼は手に持つ鴨南蛮定食が零れ落ちない程度に頭を下げた。

「いいから置いていきなさい」

カニカマさんが語気を強めた。

彼は反応せずに厨房の中へ消えていった。

「もしかして鴨南蛮、食べたかったの？」

とカニカマさんに訊ねていた。

「そんなことあるわけじゃないですか」

彼女は僕の発言を頑なに拒んだ。

「もしかして鴨南蛮、好きなの？」

「大っ嫌いですよ！」

カニカマさんはチキン南蛮とアジの南蛮漬けを乱雑に口のなかへ放り込んだ。

「世界で一番嫌いですよ！」

僕は、彼女の勢いに乗っかるように、ずっと頭に引っかかっていたことを訊ねてみることにした。

「もしかしてこの惑星、大リーグボール18号が完成されてたりして？」

「よくそんなことが聞けるわね」

僕の質問に答えたのはカニカマさんではなく休業さんだった。

「朝の挨拶はおはようございますだね？　と同じくらい当たり前のことを聞かないでくれるかしら？」

休業さんはおひつを開け、冷めたお米を見つめていた。

徐に、チキン南蛮とアジの南蛮漬けに箸を伸ばし、おひつの上に乗せた。

「なにしてるの？」

「お持ち帰りするのよ？」

「もうそんな時間ですか？」と、カニカマさんが言った。

「誠に勝手ながら」

「楽しい時間はあっという間ですね」

「残念で仕方がないわ」

「休業さんはこれから予定があります」

「どこへ行くの？」と、僕は訊ねた。

「どこへ行くと思う？」

「ヒントは？」

「そんなものあるわけじゃない」

「カニカマさんは知ってるの？」

「私はもちろん知ってます」

休業さんは支度が整い次第、食卓から離れた。

もちろん手にはおひつを持っている。

僕は、休業さんの行き先を考えていた。

「そうやってすぐに意味を探して安心しようとする」

休業さんがつぶけた。

「人間の悪い癖ね」

時計の針は変わることなく動きつづけている。

「生きるのに意味なんてないのに」

と呟いた休業さんは、『アディオス』と付け加えてから右手をあげた。

それから三十秒くらい、無言が貫かれた。

「私たち人間ってホントにしょうもない生き物ですよ」とカニカマさんが呟いた。

「心の底からそう思うよ」と僕も呟いた。

又、三十秒くらい経ったとき、カニカマさんが近くを通った店員さんを呼び止めて、『鴨南蛮定食一つ下さい』と注文していた。

僕は、家に帰ろう。と思った。

だからカニカマさんに、『先に帰るね』と告げて千円札を一枚、そっとテーブルの上に置いて店を後にした。

*

帰り道、

ひとり歩く僕の記憶には、

あのとき、ハタケヤマ星人が着ていたTシャツのプリントが浮かびあがっていた。

「よし、日替わり弁当でも買いに行こうか」